

遠藤周作の秘密(下)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久松, 健一 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/5260 |

遠藤周作の秘密 (下)

久松健一

これまでの要旨

「明治大学教養論集」(No. 396 2005年9月31日/No. 402 2006年1月31日所収)

正宗白鳥が『一つの秘密』のなかで引用した文言を脚色し、潤色しながら、遠藤周作は繰り返して説いた。ひとはだれでも他人には口にせぬまま「墓場まで持っていく秘密」がある、と。同時に「その秘密以外の意識には神は働かない」そう言いきった。ならば、カトリック作家遠藤周作について考える際、彼の心に封印された秘密がいかなるものであったかを問いかけずにはいられない理屈となる。これを前提に、遠藤の年譜を検証しつつ(あわせて、年譜とはいかなるものであるのかを考えながら)、これまでいくつかの謎や疑問を俎上に載せてきた。時系列の順に並べると、受洗の日月の揺れ、18歳の履歴の空白、処女作のみみ消し、婚約を破棄したフランス人女性との関係など。また、彼が自らを弱者と位置づけるにいたった背景を確認し、「人の影の部分」に照準をあてた特異な論の運びに目を向けた。一見すると脆弱だと感じとれるが、その実中身はしなやかで、反撃の矢をうちに秘めた「弱者の論理」である。やがて、こうした分析を進めていくうちに一人の人物が浮かびあがってきた。聖なるものとしてありながら、その裏に修羅を隠しもつ母の存在である。

実母がどう周作に接し、彼の心になにを残したか。そして、もう一人遠藤周作を語る際、欠くことのできない人物との関係やいかに。彼が秘め隠した「秘密」とからめて、最後にその点を見てゆくことにしたい。

死者の衣を剥ごうというのではない。一人の文学者の秘密に近づくうちに自分の胸の奥にしまっていたはずのなにかが揺れはじめる。遠藤の世界との不思議な共振が起こるのだ。そのかすかな揺れに身をゆだねるうちに、信仰と文学をつなぐ糸がほの見える。ひょっとすると遠藤周作の「秘密」を探ることは、己の心のなかを曝すことと無縁でないのかもしれない。

V

1. 誤読

神学者北森嘉蔵は、遠藤周作の母郁が逝去した時期を完全に誤解して、こんな感懐を披露している。

遠藤さんが子供の頃にご両親が離婚して、そしてお母さんの手で育てられたと思います。そして間もなくお母さんは亡くなるのです。遠藤さんの十五、六の頃でしょうか。

皆さん、いかがでしょうか……母親が父親と離婚した……まず悲劇でしょう。そして息子を引き取って、苦心惨憺して育てて、間もなく死んでいくということになりますと、しかも息子が十五、六歳のときに母が死んでいくということになりますと。こういう母親は理想化されるのですよ。ところがその母親がいつまでも生きている。——息子が三十になっても四十になっても生きて、チクリチクリと息子をいじめるなんてことになるとね、変わってくるのです。¹⁾

小説『母なるもの』に記されたつぎのような描写を、事実と早合点したために誤解が生じたと思われる。²⁾

すべてがいつもと変りなく、何かが起こった気配はなかった。玄関の前に、教会の神父が立っていた。

「お母さんは……さっき、死にました」

彼は一語一語を区切って静かに言った。その声は馬鹿な中学生の私にもはっきりとわかるほど、感情を押し殺した声だった。その声は、馬鹿な中学生の私にもはっきりとわかるほど、皮肉をこめていた。³⁾

現実と虚構の狭間に揺れる私小説的な雰囲気から生じる磁力にひっぱられた恰好で、北森は遠藤の母の死が中学時代の出来事だと信じこんだ。しかし、実際の日月はまったく違う。1953年12月29日、周作が30歳のときに実母は亡くなっている。享年58歳、懇意にしていた神父と口論をした後の脳溢血。まさに憤死、あまりにも卒然と世を去った。

この事実を照らせば、北森は二重に誤解をかさねたことになる。「こういう母親は理想化される」という記述とつじつまがあわない。北森の論の運びに乗れば、遠藤は「母親がいつまでも生きている」例にあたるからだ。

実際には30歳を過ぎて母親を失った。なのに遠藤の場合、少年時代に実母を亡くしたような印象が濃い。北森が錯誤を引きおこした所以、それは遠藤周作が母親像を理想化して繰り返してきてきた点にある。着眼は「理想化された母親像」を抱いている作家に向けられていた。そうした理想像を抱く人物には「父母の離婚」「苦心惨憺」「十五、六歳のときに母が死んでいく」といった悲劇的な過去が、いわば必須の前提として存在するとの読みが後につづいた。誤解の生まれた順序が逆なのだ。

理想の母親像を軸に作品世界を組み立てている書き手がいる。その理由を遡れば哀しい過去があるはずだという因果律、まず先にそれがあった。ところが、事実と噛みあわない。明らかな事実誤認。しかし、北森の読みは捨てがたい。真理をついているからだ。

2. 仮の死

遠藤が現実の母ではなく、理想の母に思いをよせていたとする指摘はもともとである。彼は過去の記憶を修正、美化して、特異な母親像をこしらえつづけたからだ。対照的に父についてはあまり多くを語らない。語っても、大連で暮らしていた時代に「母を棄てた」男という負のイメージが前面に押しだされ、「父親憎し」の批判が目立つばかり。⁹⁾

一方、母親については何度も繰り返しかえし触れている。小説でも、エッセイでも、対談でも、母は幾度も顔をだす。ただ、登場する母が生身のそうであった姿とぴたりと重なるわけではない。往々にして、そうあって欲しかった仮想の「『母』なるもの」が注入され、まぎれこみ、実際とはかけ離れ、変形された像が描かれる。この変形を引きおこす要因となったのは母の死である。北森の指摘の通りなのだ。ところがこの先が違う。まずは仮想の死があった。それは母との衝突である。その衝撃は「死」と表現するにふさわしいほど、周作にとって激烈な体験であった。その後10年以上の時を経て母が本当に亡くなる。

最初の衝突以後、生身の母は遠藤の心のなかで少しずつ変形されてゆく。そして母が急死した後、理想化された「母なるもの」が一気に大きくなる。母が没してから、前にも増して母子の関係は濃密になった。これは不思議なことではない。母親が一般に故郷ふるさとと形容される理由もここにある。

10代後半（具体的には18歳のとき）、遠藤は心のなかで母を殺した。「殺した」という表現が不穏当だというなら「棄てた」と言い換えてもよいだろう。『孤高の現代作家』のなかで、大里恭三郎は想像をたくましくして以下のように書き記した。

遠藤氏は、「母の烈しさ、その厳しい信仰のありようを子にも要求してくる圧力の息苦しさに耐えられなくなっ」て、「逃げ出した」（『遠藤周作・信仰と文学のはざままで』）のであろう。氏は母と激しいいさかいをして、キリスト教を罵倒し、これを放棄すると捨て科白でも残して母のもとを立ち去ったのかもしれない。⁵⁹

この憶測は事実とそれほどかけ離れてはいまい。いや、実際にはもっと激しい応酬があったのではあるまいか。完膚なきまでに相手をやり込める磔を投げあったのかもしれない。ともあれ、大連時代に父が母を棄てたように、

周作も母を見放した。しかもあろうことか、母のもとを離れ新しい妻を迎えていた父親に庇護を求めたのだ。おめおめと、そんな姿が浮かんでくる。

「母を棄てた」——その後ろめたさやひび割れた母子関係が、『母なるもの』では「中学時代の母の昇天」となり、小説『影法師』では「18歳のときの母との永別」として描かれた。『日本カトリシズムと文学』のなかに、永藤武によるこんな指摘が載っている。「その時（引用者注：小説のなかで母の死を中学時代に設定したこと）母親は死んだとまで言わずにはいられないような、その痛切な思いは罪悪感を、その後の半生を通じてごまかすことも風化させてしまうこともなく、己れの魂^(ママ)の問題として抱き続けた」⁶⁾のが遠藤周作である、と。ただし、この罪悪感は、周作青年の必然的な内的欲求を満たすために避けて通れない道であった。

3. 自我の確立

母親からいかにして離脱、独立し、個としての自我を確立するか。それは青年期を迎えた者だれしものが、意識的であるか無意識であるかを問わず、通過、経験しなくてはならない成長のプロセス。青年期のそんな心理のメカニズムについて、ユング心理学者として知られる河合隼雄はつぎのように書いている。

青年期になると、自我は今まで自分の受け入れてきた規範を根底から疑ってみ、もう一度、自分の内界から湧きあがってくる傾向によって、その自我を再構成しようとする。（中略）しかし、それは今までのように、他から与えられたものを無批判に受け取るのではなく、自分自身の欲求やあり方と照合し、みずからのものとして新たに受けとめ直したものである。⁷⁾

母から分離すること、それは「自我を再構成しようとする」周作にとって

逼迫した課題であった。しかしスムーズに事は運ばない。「つきまとう」母の力があまりにも強かったからだ。母と正面切って対立するまで、どこまでが自分でどこからが母なのか、母子関係が未分化な状態にあったためである。

「女が母親であるときほど女のエゴイズムをむき出しにすることはありません⁹⁾」とは、『ふなくい虫』(大庭みな子著)に記されている言葉だが、遠藤家には父親が不在であったため、母はむき出しな「我」をいっそう表にだしがちであったに違いない。母性を抑圧する力が家庭内になかったからだ。勢い、母は子に対して自己本位で、過剰な期待をかけがち。母と子の一体感は強調され、ときに絶対視さえされ、その絆を破るものを排除しようとする遠心力が働く。「己の弱さ」を実感している繊細な感受性を持つ息子に対して、上昇志向をつねに求めていた母の有り様もそうした心理の変形と言えそう。母親郁は、たとえば言えば、信仰を高めへと登る視点でしかとらえていなかった節がある。だが、弱さと信仰は矛盾するものではない。実際には高めからくだってゆく宗教的な観点があってもよい。いやむしろ、弱さに目を向けない頑迷の方が危険である。なのに、遠藤郁は息子周作に厳しく道を説いた。すでに触れたように郁は気丈な人物。子供に対する一途な愛情に溢れてはいるものの、その反面、並はずれた厳格さを求める一徹を持ちあわせていた。とことんまで自分を追いこむ分、他人にも容赦はない。たとえば、ホーリー holy であれとことあるごとに息子に説いていたという。以下の引用は遠藤の妻、順子の回想である。

主人と主人の兄(引用者注:遠藤周作と兄正介のこと)が二人よると、「なにかと言え、あなたはホーリーではないと言われたなあ」といつでも申しておりました。そう言われるのが、二人ともたいへんな痛手だったようです。いたずらはかまわないそうなんです。ホーリーではないのはだめなんだ、と。⁹⁾

生身の母の性格はきつく、険しく、苛烈でさえあった。おそらく自由は相当に制限されていたと思われる。おどけた調子で回想するなら「そうそう、その気持ちよ、うちのおふくろがおっかなかったから、受けない（引用者注：中学時代の受洗のこと）なんていったらものすごくこわいわけよ」¹⁰⁾となる母であるが、小説のなかでは「赤く燃えていた炎のようなもの――どんな人でもそれにふれれば人生に痕跡を受けた」¹¹⁾と描写されるのが、遠藤の母郁である。

自我を確立するために、「自分の内界から湧きあがってくる」ものを押し殺す存在である母親。そんな母を切り捨てるほか手だてはなかった。

十代二十代のとき、私は自分の母親に対してうるさいという感情、ベタベタしてくる、邪魔をするという感情しかなかった。¹²⁾

4. 懐 疑

母との対立は、同時にキリスト教への不信感をつのらせてゆく。母と臍の緒がつながっていたと形容できる少年期には、自ら神父になると周囲に告白していた子供が、一転、キリスト教への不信をあらわにする。

宗教心理学の立場から青年期における信仰と自己との関係を見てみると、16歳以前の段階でその3分の2が、一度は信仰に対する懐疑の念にとらわれるという。¹³⁾ 成長の過渡期にある青年は、加速度を帯びたようにいちじるしい身体的発達をとげる一方で、人格的にはいまだ未熟な状態にある。知的、情緒的な発達をとげながらも、社会的、経済的な地位は低く、しかるべき権限も与えられていない。一言で言って、はなはだ不均衡な状態にある。それは宗教においても同じこと。それまで承認し、敬い、崇めていた信仰とは調和しない事実や理論を目の当たりにして失望感にさいなまれたり、肉体的な不安に由来する感情の揺れなどが引き金となって、宗教的懐疑が生まれやす

い状態になる。自我の発達と相まって、信仰を自らの問題として再検討しようとする意志がわきあがり、疑念をも呼びおこすのだ。それは遠藤にとっても同じことであった。

十八、九歳、つまり慶応の予科のころ、本を読み始めてから「こんな西洋の宗教なんて棄てたれ」と思ったことがありました。(中略)

神様の存在を疑ったときは、いろいろな本を読みました。ここに何かが存在すれば、その原因があって、さらにその原因があって、またその原因があって……、その第一原因が神だという、神の存在の証明法——中世のトマスの哲学書などを一生懸命読んだりしました。¹⁴⁾

キリスト教をめぐる時代背景もあろう。遠藤の幼少年期から青年期にかけて、カトリックは近代主義 modernisme (厳正な歴史的解釈を伝統的な教会ならびに聖書に加えることでキリスト教を再検討しようとする 20 世紀前半の新思想) を容認せず、儀式やミサなど宗教的な雰囲気、教会擁護の粉飾を重視していた。知的な面から神認識をうながすカトリック的な「知性」より、伝統的で神秘的な啓示や聖霊の証言によってたつカトリック的な「感性」を信者に植えつけることに力点がかけられていた時代である。そんな空気のせいで、青年期の遠藤周作は窒息しかけていたに相違あるまい。

後に「神とは存在ではなく働きである」¹⁵⁾ とする心境に達する遠藤だが、青年期以降かなりの時期、神がいるのかいないのか、その証明法はいかなるものかといった宗教的な疑念にとらわれていた。「もし神がいなかったとしたら」そんな掟破りが頭のなかを駆けめぐる。¹⁶⁾

ただし、上記の引用にある「十八、九歳、つまり慶応の予科のころ」という発言は正しくない。宗教的な疑心が頭をもたげたのは 1941 年 (昭和 16 年)、遠藤周作が 18 歳のとき。その際、籍を置いていたのは上智大学である (ちなみに慶応大学予科に入学したのは 20 歳のとき)。後述するように、上智大

学入学は、遠藤周作の意志ではなく郁の意向に添ったものと考えざるを得ない。¹⁷⁾ 大学の選択さえ母の影響下にあった。それほどまでに母の力は強かった。それがさらなる反発の要因となったのだ。

5. 実人生

18歳の周作は上智大学での生活に満足せず、再受験を考えていた。その一方で、受験勉強が本物の学びとはほど遠いことに絶望しはじめていた。また学歴という問題も肩に重くのしかかっていたはずだ。父親は東京帝国大学独法科の出身、母親は東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部）卒、兄は東京帝国大学法学部政治学科に在学中であった（兄正介は、灘中学始まって以来の秀才ともてはやされたという）。

自分を探しあぐねていた。そこに母への不信、神への不信が頭をもたげ、ふさいだ気持ちに輪をかける。そんな激しく揺れる心理状態のなかで物されたのが、幻の処女作「形而上的の神、宗教的の神」である。この処女評論の内容を一言でまとめるなら、神の存在証明に関する背のびをした宗教的アプローチ。18歳の青年が何冊もの哲学書や宗教書を読みあさり（特にトマス・アクィナスの神の存在証明、つまり、すべての運動に原因と結果がある以上、そのもととなる第一原因＝神がなくてはならないとする考え方を軸に時代を分析し、進むべき道を模索したネオ・トミスムとよばれた哲学の影響を受けながら）、「こんな西洋の宗教なんて棄てたれ」との思いを胸に、「神は存在するのか。存在しているとすれば、この世にある不条理に対してどうして沈黙したままなのか」そうした疑問をぶつけたものである。

しかしながら、生硬で、若書きのこの論考は闇に葬られた。その理由を推察すれば、「神に対する不信」が母親郁との生々しい対立の記憶と重なりあうからではないか。処女作は信仰を「棄てようとしていた」ことを明らかにするとともに、そこで展開した論が、母への、神への「裏切り」の証となるからではないだろうか。

遠藤周作は「18歳・母親・信仰」というキーワードが重なるとそれを丁寧に履歴から削除してきた。その意味で、明らかに自分の信仰上の影の部分から生まれた処女作は、速やかに年譜から削除する必要があった。むしろ、上智に在籍していたことも履歴から消す必要がある。いまましい時代への嫌悪感の故である。その代わりに、おどけた筆致を巧みに織りこみながら、うとましい記憶から自分自身を遠ざけるとともに、読者の目を逸らす策にでた。すでに見たように浪人生活3年間の年譜でクローズアップさせ、そこにさまざまな演出を施すことで、母と神を裏切っていた心の暗部にそっとヴェールをかけたのだ。

世間にトランプゲームの持ち札を曝すわけにはいかない。信仰心が揺れていますと本音を吐露することは、自らの存在意義を否定することになりかねない。本心を見せる代わりに、小説作品のなかで（たとえば「弱者の論理」を用いて）自らの「秘密」を変形、昇華する方法を選んだ。それが文学者としての姿勢であり、自らの信じるキリスト教を生きることにつながると考えた。

遠藤周作は実体験を材料に作品を生み出すあり方を嫌っていたことで知られる。たとえば、こんな発言。

ある芸術家が芸術家として目覚めさせられ、成熟していくのは、彼の実人生によるものではなく、他人の芸術的作品を通過することによってであるからだ。(中略) 経験の集積を質的にも量的にも豊富にもっただけでは作品を創ることはできぬ。¹⁸⁾

これを受けて、川嶋至は、遠藤周作を「徹底して芸術における実体験の意味を軽視した」¹⁹⁾人物と位置づける。だが、そうは思えない。

遠藤ほど実人生から作品をつむぎだした作家は少ないのではないか。私小説を書いたという意味ではない。遠藤ほど自己を練りかえし見つめ、自己矛

盾になさいなまれながら、人生の意味を噛みしめつづけた男は稀だと言いたいのだ。遠藤は小説家として「たえず自分の過去のまずしい体験や心理を牛のように反芻している」²⁰⁾と告白したが、これは彼の小説作法の神髄である。安岡章太郎のいう「海で釣り上げたばかりの魚みたいな」「ぬるぬるしていて、とりとめがない」生々しい体験を、反芻しながら、「体験から経験に搾り上げてくる力、腕力」²¹⁾で作品化してゆく。一見、実際の体験であるとの印象は薄い。しかし、どれほど反芻し、もとの形が変わろうとも、それが生きた体験であることに変わりはない。したがって、そこに秘められたものも創作のプロセスを逆にたどってゆけば自ずと明らかになる。

VI

1. 二重の生き方

遠藤周作の信仰不信は青年期にとどまらない。不安定な時期は、優に20年以上つづいたはずだ。だが、キリスト教信仰への懐疑の念を表にださなかった。いや、だせなかった。これが遠藤の秘め隠した「人には言えぬ秘密」の核である。18歳から30歳をすぎてもなお、遠藤は自分がキリスト教信者であることに違和感を覚えていた。延々とキリスト教徒の苦悩を味わい、宗教的危機に揺れていたのだ。

1947年（昭和22年）24歳の遠藤は「神々と神と」でカトリックの信仰を背景にもつ評論家としてデビューした。その延長上に位置する「カトリックの信仰の問題を取りあげた」²²⁾『白い人』によって、1955年（昭和30年）、32歳で芥川賞を受賞した。後に、処女小説『アデンまで』を書いた当時の心境（芥川賞を受賞する9ヶ月ほど前の時点）を回顧しながら、

あこのろの自分の気持としますと、キリスト教ならキリスト教というもののなかに、はいり込めん、と。これは個人的な、やはり『信仰』の問

題になりますね。それで、とてもはいり込めん、と。とって、棄てる
ことができないわけです。もう長いこと、はいり込めない。²³⁾

と嘆息混じりに語っている。しかしながら、1955年当時、そんな発言がで
きようはずはない。1950年(昭和25年)の時点、日本がいまだGHQ占領
下でありながら、遠藤がフランス留学生として選ばれたのも、カトリック信
者という条件があればこそであったのだから。

信仰を巧みに利用、活用して世に出た。母親にキリスト教という「ダブダ
ブの洋服」を着せられたがために、着実に成功をおさめることができた。ま
さか、心の奥にはキリスト教への不信感を抱えていると口にはできるはずはな
い。信仰を出汁^{だし}にしている、裏切っている。痛いほどその意識はあったはず
なのだ。

世間には嘘をつき、本心は誰にも決して見せぬという二重の生き方を、
一生の間、送らねばならなかったかくれの中に、私は時として、自分の
姿をそのまま感じることもある。²⁴⁾

ただし、「自分の嘘」を「裏切り」を意識しているということは、裏をか
えせば、キリスト教と遠藤とがつながっているという証左である。もしつな
がっていなければ、切れた時点でおしまい。苦しみなど生まれやしない。

2. 決意

遠藤の初期作品を「カトリック作家」という先入観で読み解くのは危険で
ある。そもそも、キリスト教信仰に立って書かれた作品と見るのは正しくな
い。信仰を棄ててはいないが、そこに描かれている信仰心は変形されている
し、大きく揺らいでいる。存在のフォームとしてある宗教、つまり自分がど
のような存在で、今後どのような存在となり得るかという目的としてのカト

リックを見失っていたといえるからだ。作品には技術的なマイナス面も目につく。たとえば村松剛の言うように、さながら「象徴詩を読むような注意深さを」読み手に要求し、「ひとつひとつの語句に、少々過度の負担を負わせている」²⁵⁾との弱点が指摘できる。だが皮肉なことに、初期作品は遠藤の心に信仰への揺らぎがあるために、護教文学ではない独特の匂いを漂わせている。そして、そこから張りつめた緊張感が醸しだされる。だが繰り返して言う。この時期、遠藤の信仰心はぐにゃりとゆがんでいた。

後述するように、遠藤がふたたび信仰心を取りもどしたのは第2ヴァチカン公会議が終った1965年（昭和40年）前後のことと思われる。だが、事はそう単純ではない。その後も、神を信じる心が安定したとは言えないからだ。「文は人なり」とはあまりにも有名な言葉だが、その「文」＝「文体」について遠藤はつぎのように語っている。1965年の発言である。

僕の場合、外部的にいろいろなものがそれぞれ違った形で僕の中に矛盾してもっています。（中略）たとえばカトリック。カトリックを信じているぼくとカトリックを信じていないぼく。正直言ってスタイルが決まるためには、僕が僕自身の全体をつかんでいなければだね、文体というのはできなのだよ。²⁶⁾

この時点でも、明らかな信仰心の揺れが感じられる。いまだに、自身の全体をつかんでいない身には「文体＝人となり」が見えていないと率直に心情を吐露しているからだ。

ただ、37歳から39歳にかけて（1960-62年）、都合2年2ヶ月におよぶ入院生活（肺の手術に三たび耐えた）の後、遠藤の心の構えが微妙に変わったのは間違いあるまい。²⁷⁾生死が五分五分の病をなんとか克服できたことで、おそらくは「神の加護」²⁸⁾を身にしみてはっきりと感じたためであろうが、「神を所有できていないこと」に対して思いわずらう心情から、「神を所有で

きている」からこそ「神を求める」のだという心境に意識が転じたように思われるのだ。こう言い換えてもよい。それまでは、信仰の外に出るべきか否か、つまり「信仰を棄てる」か「棄てずにいるか」という二者択一にとらわれていた。軸足の定まらない、実の伴わない疑義を内包した信心を抱いたまま、カトリック作家を演じていたといえる。ところが「信仰のなかにいながら神に問いかける」道もあると遠藤は悟った。小説『私のもの』のなかで、作中人物に「犬のように哀しそうな眼」をした「あの男」に向けて言わせた一言は、そうした強い意志を自らに宣した決意表明であったに違いない。

しかしあなたを一生、棄てはせん。²⁹⁾

ただし、矛盾しているように聞こえるかもしれないが、遠藤が文字通りカトリック作家でいられたのは、こうした揺れがあったからこそである。語源を遡るまでもなく「普遍的な(万人におよぶ)」を意味する *catholique* を、もし遠藤がそのまま受け入れていたとしたら、もし揺れ動く信仰心や秘め隠そうとする思いがなかったとしたら、彼の手がけた作品は護教文学に墮した可能性が高い。フランス人のカトリック作家ジュリアン・グリーン J. Green は『フランスカトリック信者への訴え』のなかで、

On ne croit pas sans se livrer bataille, mais ils ne luttent pas avec eux-mêmes.

人は自らと戦いを交えることなく信仰にいたることはない。しかし、彼ら(引用者注: 宗教という習慣のなかに盲目的に安住している人たち)は自らと戦わずににいる。³⁰⁾

と記したが、少なくとも神を前に悩んだからこそ、^{カトリック}普遍主義に対する疑いがあったからこそ、遠藤はここでいう「彼ら」の側に含まれずにすんだのだから。

VII

遠藤周作を語る際、そして彼の秘密を考えるとときに、避けて通れない人物がもう一人いる。元上智大学教授ヘルツォグ神父³¹⁾である。

この先さらにもう一步、遠藤の「秘密」に深く踏みこんでゆくことにしたい。いささか^{えがら}藪辛い人間関係にも目を向ける。それに際して、今一度、本稿のスタンスを夙に知られた挿話で確認しておくことにしたい。文脈上、いささか唐突だと感じられるかもしれないが、「岩端^{はな}やここにもひとり月の客」の句をめぐる弟子と師匠とのやりとりである。

向井去来は言う。この句の解釈は「岩端に月見に出向くとすでに風流人が独りその場で月を愛でていた」その様を詠んだものだ、と。それを聞き芭蕉は言ったという。自分が月見をしているとそこに風流人がやって来た。そこで「ここに月に浮かれた先客がおりますよと自ら名乗りでた」と解したい。それが風流ではないか、と。すなわち、すでに触れた遠藤の言う「事実」と「真実」との関係を思いだしていただきたい。³²⁾

「遠藤周作」そのものがテキストであり、いうならば、彼の人生がさまざまに読み解きに曝された書物、多様な解釈の対象となる存在であるのだ。僭越ながら、下記の引用をもって拙論の構えと言い換えてもよい。

文学の批評は、常に冴えた偏見によって生きる。批評が「公正」であるか否かを判定する審問官など、文学の世界には存在し得ない。³³⁾

さらに、一步を踏み出してみたい。

1. 遠藤郁とヘルツォグ神父

遠藤周作の「秘密」がどのようなものをさらに探るために、遠藤家（と

くに郁)とヘルツォグ神父との接触到重点を置いて、以下に年譜を制作した。年譜形式としたのは、事の性質上、できるだけ主観が紛れこむ危険を回避したかったからである。³¹⁾

遠藤郁とヘルツォグ神父を中心とした年譜

| | |
|----------------------------|--|
| 1933年 (周作10歳) | 両親が離婚。母郁，長男（正介）と周作を連れ大連より帰国する。 |
| 1935年 4月 (12歳) 5月29日 | 周作は私立灘中学に入学。同月，郁は宝塚市の <small>カトリック</small> 小林聖心女子学院の音楽教師となる。 郁，受洗す。姉（姓：関川）の影響とともに，小林聖心女子学院院長のマザー・マイヤー，ならびに修道女マザー・ハミルトンの感化による受洗であった。数年後，イエズス会のドイツ人神父ペーテル・ヘルツォグと出会い，その指導の下，郁の厳しい祈りの生活に拍車がかかる。ヘルツォグ神父はその当時，若いながら学識に富み，筋肉質な美丈夫であったという。 ³²⁾ |
| 1941年 4月 (18歳) | 周作は上智大学予科甲類（ドイツ語）に入学。同月，ヘルツォグ神父が上智大学教授に就任。遠藤家とヘルツォグ神父との緊密なつながりを考えれば，周作の上智大学入学は本人の意志ではなく，郁のそれであった可能性が高い。苦しい生活のなかで，息子の学資支給者となったのも郁である。大学の選択さえも母の影響下（信仰の影響下というべきか）にあった。また，上智入学当初，学生寮内で神父たちの施した教育（鍛錬）は周作の脆弱な体に負担をかけた。信仰の重みが，肉体にまで及んだ恰好。そんななか，周作は12月に処女評論を発表した。 |
| 1942年 2月 (19歳) | 周作は上智大学予科を退学し，旧制高校をめざして浪人生活にもどる。周作は母のもとを離れ，再婚していた経堂に住む父親の家へと移り住む。母は兵庫県で，一人で暮らすことになる。 |
| 1943年 4月 (20歳) | 周作は慶應義塾大学文学部予科に入学。息子が東京，母が神戸という離ればなれの状況下，しかも対立が続いている最中，ヘルツォグ神父が二人の連絡係（橋渡し）をしていた。 |
| 1944年 8月 (21歳) | ヘルツォグ神父の著書『神の光榮』（上智學院出版部，1944年8月25日）を遠藤郁が翻訳する。 ³³⁾ |
| 1948年 3月 (25歳) 5月 | 慶應義塾大学仏文科卒業。同月，郁は小林聖心女子学院を辞す。 ヘルツォグ神父がアメリカのカトリック・ダイジェスト社から指名を受け，雑誌「カトリック・ダイジェスト」日本語版の編集長となる。 |

| | |
|---|--|
| | 周作, その編集を手伝う。ほどなく, 郁も四谷のカトリック・ダイジェスト社のビルに移り住み, 編集発行の仕事に携わることになる。 |
| 1950年6月 (27歳) | 周作, フランスへ留学。『作家の日記』には「1950年6月4日(金)午後四時半, ヘルツォグ師に自動車で品川駅まで送られそこで師と別れる。流石に感無量で辛かった」(p.5)とある。なお, 周作の壮行会で母は色紙に「別離もまた愛」と記したという。 |
| 1951年11月 (28歳)) 1952年7月 | 周作, 「赤ゲットの仏蘭西旅行」を「カトリック・ダイジェスト」に連載。彼は留学中に, フランスの「エスプリ」誌に刺激を受け, 帰国後, カトリック・ダイジェストの編集長となって雑誌を活性化したいと真剣に考えていた。 |
| 1953年1月 (30歳) 4月 12月 12月29日 | 肺を病み帰国(帰国前, 滞仏最後の3泊4日の旅をフランソワーズ・パストルと共にする)。 周作, ヘルツォグ神父にかわってカトリック・ダイジェスト誌の編集長となる。同誌に「続・赤ゲットの仏蘭西旅行」を連載する。 「カトリック・ダイジェスト」誌(日本語版)終刊となる。 郁は雑誌の終刊をめぐってヘルツォグ神父と口論となり, その直後, 脳溢血で倒れ, そのまま不帰の客となる。享年58歳。周作は臨終に間に合わなかった。 |
| 1955年9月 (32歳) | 周作, 岡田順子と結婚。ヘルツォグ神父の司式により結婚式を行う。結婚当時, 夫人がクリスチャンでなかったため, キリスト教を学ぶ意味でヘルツォグ神父のところへ足を運ぶ。しかし数回出向くも, ある違和感を覚えて公教要理は中止。秘書と神父との仲がただならぬ関係であると夫人が察したため。 |
| 1957年6月 (34歳) 9月 | 上智学院修道院長と上智大学学監を兼務していたヘルツォグ神父が失踪, 解雇される。 ヘルツォグはイエズス会を退会。還俗して日本人女性と結婚する。信頼していた神父の裏切りに, 周作は激しく動揺, 落ちこむ。 |
| 1960年4月 (37歳) | 周作, 東大伝研病院に入院。その後, 慶応大学病院へ転院する。翌年, 3度に渡る手術。1962年 退院。 |

* (追記) 棄教神父の登場する『火山』(1959年)が物され, ヘルツォグ神父の生き様と連動した『沈黙』(1966年)が編まれ, ヘルツォグ神父を題材にした短編『影法師』(1968年)が編まれる。

この「年譜」を通じて, 下種な勘ぐりをしようというのではない。遠藤が「ゆがんだ信仰心」をひたすら隠していたまさにその時期, つまり18歳から, 肺を病み3度の大手術に耐えぬくまでの約20年間(第2ヴァチカン公会

議³⁷⁾が終る1965年頃まで)には、さらなる「微妙な心のゆがみ」が隠されていると思われるのだ。

2. 疑問

穏やかでない言い方になるが、遠藤郁の死の直前には疑問がある。おそらく心臓を患っていたのだろう。薬を常用していたのかもしれない。しかし、争いの原因が雑誌の終刊をめぐるというのは不自然ではないか。ヘルツォグ神父との並々ならぬ親密度からして、雑誌の存続をめぐる意見交換ならば、この先、何度でも話し合う機会があったはずではないか。再刊の可能性を模索する術もあったはずだ。不肖の息子から雑誌をとりあげることに痛憤したという通説は本当なのだろうか。そもそも郁の死は、天の与えた不可避な運命であったのだろうか。ひょっとして覚悟の死ではなかったか。「冴えた偏見」を記すことを許されるなら、「自殺」にも近い、「自らの死」と引き換えにした何らかの抵抗・抗議ではなかったか。

遠藤の自作年譜のなかで、母の死はあまりにあっさり扱われすぎている。ときにその死にまったく触れていない自作年譜さえある。³⁸⁾年譜に載せたくないなにごとかが隠されている、そう勘ぐりたくなる。これまで「秘密」に類するものは、ことごとく年譜で変形されるか、さもなければ削られてきたからだ。

想像をたくましくすると、こんな例にぶつかる。『足のむくまま 気のむくまま』(狐狸庵風来帖)と題されたエッセイの最後行、遠藤周作はすこぶる生真面目な調子でこんな一文を草しているのだ。周囲とのバランスを欠いた、調子のまったく違う文章である。

「人間には誰でも、それを他人に知られれば、死んでしまった方がましだという秘密がある」

今、手許にその本がないので正確にうつすことは出来ないが、たしかそのようなことを書いていたと記憶する。

そしてそれは過失ではなく、罪の匂いをともなった秘密だから、我々はそれを人に知られたくないのである。

過失は文学にはならないが、白鳥の言う心の秘密は文学になる。思えば、私もその秘密を糧として小説を書いてきたようなものだ。

十二月になると、それらの秘密の集積が誰も疼くものらしい。十二月には自殺するものが多い。（棒線部引用者）。³⁹⁾

切れ切れの段落に、胸を病んでいる遠藤の荒々しい呼吸が乗り移ったように感じられる。とまれ、遠藤郁の死も12月。ただ、これ以上の贅言はひかえたい。

3. 激 怒

かつて、遠藤周作が妻に向かって声を荒げたことが二度あったという。一度は18歳の息子に母親が近づくことを禁じたとき。

息子が十八歳になった時に、「お前はもう息子から離れろ！」と主人に言われました。「十八歳以上の男の子にとって母親とは有害以外の何ものでもない」というのが主人の考え方でした。⁴⁰⁾

「お前はもう息子から離れろ！」という言葉は、遠藤自身の18歳のときのあの苦々しい体験が言わしめた。それは間違いあるまい。

そして、今一度はヘルツォグ神父にからむこんな逸話。遠藤が激しく怒りをあらわにした瞬間があったのだ。キリスト教の勉強のために遠藤順子がヘルツォグ神父を訪れていたときのことである。いささか長い引用になるが、主観を交えぬ意味で夫人の証言を途中省略せずにそのまま抜き書きしたい。

H 神父様は母国語のドイツ語は無論のこと、英、仏、西、ラテン語、

ギリシャ語に通じておられ学識豊かな方と主人から聞いていましたから、はじめて部屋をお訊ねした時は緊張していて何を伺って来たのか全く覚えていない有様でした。幸いH神父様の部屋には主人の従兄弟の家内が秘書として、衝立で仕切った向こう側に机を置いて控えてくれていましたので、ほっとしたのを今でもよく覚えています。始めの一、二回はこちらも固くなっていたのだと思いますが、回を重ねるうちに、私は妙なことに気がついてしまったのです。女の第六感と言うより他はありません。困ったことになったと思い悩みました。

何といっても片や主人が父代わりのように思い、その人格と学識を高く評価している神父様であり、片やこれまた主人の従兄弟の嫁さんです。うっかりした事は言えませんが、そうかといって見ざる聞かざるで毎週公教要理の勉強に通うだけの勇氣も持てなくなりました。まだ始まったばかりの学習はこれから一年は少なくとも続く筈です。お二人の間に毎週毎週、割り込むことが出来なくなるのには時間はかゝりませんでした。「何故行かないんだ?」、事が信仰に関する話ですから主人も真剣に怒っているのです。その度毎に「頭が痛い」「喉が痛い」とも言っていられなくなりました。ついにある日、意を決して主人に「あの二人は尋常な仲ではないと思うので、あそこへは通えない」と清水の舞台から飛び降りたつもりで申しました。私の答えに主人の怒りは凄まじいものでした。私は不器用な上に雑でドジばかりやっていたから、怒られたり怒鳴られたりは年中でしたが、主人があの時程怒ったことはその後一度も見ただことはありませんでした。「あの人格高潔な神父さんに対してお前は何という汚らわしい想像しか出来ないのか?」「お前は神父様に公教要理を教えて頂く資格などない人間だ」「そのようなお前の考えを知った以上、もう神父様にお前の指導をお願いするわけには行かない。お前は自分の汚れた心の為に折角俺が作ってやったチャンスをみすみす駄目にしたんだ」と大怒りでした。

ところが、ほどなくこの問題をめぐり、ヘルツォグ神父が還俗を余儀なくされる。教会から追放され、ミサにもあずかれない身となる。これを知らされた際に遠藤が落胆、動揺する姿を夫人はこう記している。

主人はまるで自分が死刑の宣告でも受けたような様子でした。相手の女性が自分達兄弟の従兄弟に当たる人の家内であった事が二重の重荷となりました。ドイツから波濤万里を隔てたこの国へ宣教に来られ、多くの信者からの尊敬を集められた神父様でした。よもや教会破門や追放が待っていたとは、いくら神様のご計画とは言え余りにもむごすぎると、私のような未信者を前にして普段なら絶対に口にはしないであろうことまでつい口走ってしまう程、主人は千々に乱れた心境で何ヶ月間かを過ごしていました。⁴¹⁾

それまで、遠藤の意識のなかでヘルツォグ神父は明らかに「強者」の側にいた。少年時代からのあこがれであった。高潔な人格、高い学識、自信ありげな微笑、清潔な服装、手入れの行き届いた顔や指先。すべてが理想的であった。事実、母親は「そんなことで、神父さまのようになれると思うの」と諫め、周作を睨みつけたという。⁴²⁾ だがいきなりの暗転。いや、暗転は失敬な発言かもしれぬ。神父本人にとってみれば、覚悟の還俗かもしれないからだ。それを自ら望んだのかもしれない。しかし、遠藤からすればあまりにむごい神の仕打ちと見えた。「神も仏もあるものか」そう叫んだに違いない。

ひょっとすると、死んだ母のことが頭をよぎったかもしれない。高潔だと信じて疑わない人物が他人の女に手を出した。聖職者でありながら神に背き、日本人女性と結婚、教会から身を引いた。しかも相手の女性には夫がいる。自分の知っている相手だ。ということは、まさか。母はかつて「惜しいわね。あんな人が結婚もしないで神父になるなんて」⁴³⁾ と失言を口にしたことがあ

る。そんな、まさか。遠藤周作の頭のなかをこの「まさか」がよぎった刹那はなかつたらうか。⁴¹⁾

4. 影法師

「波涛万里を隔てたこの国へ宣教に来られ、多くの信者からの尊敬を集められた神父様でした。よもや教会破門や追放が待っていたとは、いくら神様のご計画とは言え余りにもむごすぎる」。この文言が遠藤夫人による創作でないなら、そっくりそのまま『沈黙』に描かれたロドリゴやフェレイラの生き様と重なりあう。そして『「神も仏もあるものか』という言葉から信仰が生まれる」とする遠藤の特異な宗教感は、ヘルツォグ神父の還俗に影響を受けての発言である可能性が高い。

遠藤は「自分と母との関係をしゃぶるうちに文学につながり、宗教につながっていきました」⁴²⁾と語ったが、自分と神父との関係も同様に「しゃぶった」。「しゃぶりながら」神父の心を探ろうとした。そこから、遠藤周作なりの文学世界が生まれ、信仰心が育った。はっきりとヘルツォグ神父を題材とした小説『影法師』（帯には――問題作『沈黙』につづき、信仰の問題に対する著者の内面の深化と豊かさを反映させた作品である――とある）のなかにこう書かれている。

いや、嘘だ。僕はあなたのことを、小説家になってから三度、人にわからぬように変形させて書いています。貴方は、あの事件以来、僕にとって長い間、文字通り重要な作中人物でした。重要な作中人物なのに貴方を書いた小説はほとんど失敗してきた。理由はわかっている。それは僕が貴方をしっかり掴めていなかったからだ。しかし失敗をつづけたにもかかわらず、貴方は僕の心の世界にひっかかるのを決してやめなかった。払いのければどんなに楽だったか。しかし、僕にとって母や貴方はどうして払いのけることができましよう。⁴³⁾

なぜ、ヘルツォグ神父を扱った小品の題が『影法師』なのだろうか。言うまでもないが、「影法師」とは、光があって地面や帽子などに映る人や物の影のこと。田中澄江はそれを「影踏みごっこ」という「陰気な遊び」からの類推で「自分の影の領分に、他人を踏みこませることは、自分の生身を犯されるような、あと味の悪さをそそったのではないだろうか」⁴⁷⁾と書き、負のイメージでこのタイトルをとらえた。たしかに、描かれた作品の中身は重く、暗い。救いは見いだしがたい。しかし、はたしてそうなのか。「強者」の心に秘められた孤独、寂寞がテーマであるにしても、光は差しこんでいないのか。第一、光がなければ影はできないのではないか。

ヘルツォグ神父の弱さと主人公の弱さが重なり合う『影法師』のなかのシーンに目をとめてみたい。一見対極にいるかに見えた二人が、実は同じ「弱者」として重なりあう場面である。このとき初めて、どちらが主で、どちらが従の側にいるのかが判然としなくなる。

僕は今日に至るまで一度として自分のすべてに自信も信念も所有できなかった男だった。こう申せば、おそらくは今の貴方ならもう全てを理解して下さるだろう。しかし昔の貴方なら断固として首をふられたでしょう。首をふって、人間とは生涯、より高いものにむかって努力する存在だと、大声で言われたでしょう。しかし、そのような強さにも思いがけぬ罅と薄氷のような危険がひそんでいることを——そこから本当の宗教が始まることを、貴方は十五年後に知らねばならなかったのではないでしょうか。⁴⁸⁾

ここで「弱さ」に光があたっている。そしてその目に見えぬ光は、心理の次元を超えた無意識、魂の次元に属するもの。したがって、この光の持つ意味は小説の余白にある。神のみぞ知る領域である。ただし、展開されている

ロジックは、すでに検証した「弱者の論理」だ。

「弱者の論理」は観点を調べてみれば、それは母性へつながる道。なぜなら「弱さ」をもよしとするのは「包括」のイメージであり、父性の持つ特色である「切断」と対極に位置するものであるからだ。母性がすべてを平等に、一体として扱おうとするのに対して、父性は個々を差別化し、分離しようとする。神の教えに背いた神父が教会を追われるのは「分離・切断」であり、まさしく父性原理の表れである。「神は父である」とするのが通常のキリスト教の教義であり、そこに働いているのは父性原理だ。河合隼雄は『どう考える 母なるもの』のなかに「神との契約を守る選民のみが救済されるというその背後には、契約を守るものと守らないものを判然と分離する父性原理がはたらいている。このような父性原理の厳しさによって、西洋人は鍛えられ、自我を確立してきたと考えられる」⁴⁹⁾と記しているが、遠藤の視線はまったく違う。

遠藤が還俗した神父を見つめるそのまなざしは日本的な感性にのっとっている。キリスト教が育ってきたヨーロッパ的な感性とは相容れない。だが、意識的であれ無意識であれ、遠藤周作はそれをよしとした。彼は、自分がキリスト教によって変えられるだけでなく、自らキリスト教を変えられるのではないか（あるいは変えなくてはならない）と発想した。端的に言えば、キリスト教を主観的にとらえるいささか危険なあり方だ。キリスト教に日本の汎神論的な風土を接ぎ木し（わけても、井上洋治の指摘する「汎存神論」⁵⁰⁾ パンエンティズム 的着眼を持ちこみ）、母性原理を取りいれ、ときには、イエスに関わる史実を文学的に大胆に解釈する。それが宗教的危機を脱した遠藤が心に誓った信仰上の決断であった。後年、富士登山にからめた比喩が遠藤のお気に入りであったが、それは彼の信仰の姿勢を端的に示している。

富士山の頂上に至るためには、東西南北いずれから登っても差し仕えないように、神に向かう路はいつも西欧のなかで育った今までの基督教観

念を、そのまま真似る必要はないからだ。むしろ日本人には、日本人の感覚にそった基督教の信仰もありうると私個人は思っているのである。⁵¹⁾

これは、たとえば『神は多くの名前をもつ』*God Has Many Names*の著書で知られるジョン・ヒックの宗教的多元論⁵²⁾や神学者デヴィッド・ミラーの『新しい多神教』*New Polytheism*,あるいはまた、低次元の普遍主義に墮していないシンクレティズム（諸宗混淆——つまり、普遍的な宗教と民族的な宗教との出会い）の着眼などに通底している。そしてそれこそが、世間に秘め隠した自らの信仰の危機を脱した遠藤周作にとっての新たな信仰への道であったのだ。

結

遠藤の生き様は矛盾している。一言でいえば、キリスト教という異文化と自身との距離を意識しながら、それと戦い、もがき、弱者たる自己を凝視しながら、反転、キリスト教へと迫ってゆくあり方だからである。その姿勢は既成のカトリックとかけ離れていて、教会内の宗教とはかなり毛色の違うものとなっている。

そうした遠藤の信仰に対して、元来、カトリック教会とは普遍的な教会であるはずで、かりにも「日本的」（あるいは「遠藤的」）といったことを許容するとしたなら、カトリックは「普遍性」を自ら否定することにつながる。そうした批判は容易に可能だ。むしろ、その点に遠藤自身気づいていないはずはない。

遠藤周作にはカトリック作家という称号が冠されている。だが、それは西洋的な感性を生きた書き手という意味ではない。肯定的に言えば、西洋と東洋との「和合」「融合」に努めた作家と言えるが、口さがない人から言えば「異端」と映る小説家である。事実、『沈黙』が九州地区で禁書扱いを受けた

こともある。だが、そもそも正統か異端かの別は善悪の違いではない。視点の差なのだ。

皮肉なことに、遠藤の宗教観はいわば異端的であるからこそ「この地」＝「日本」に根づいた。『沈黙』のなかで、背教者フェレイラは日本を沼地と称し、この地にキリスト教は根づかないと嘆いたが、少なくとも遠藤の考えるキリスト教信仰は確実にここに根をおろした。三浦朱門、安岡章太郎、矢代静一、高橋たか子といった文人はもちろんのこと、無名のあまたの人たちが遠藤周作に影響され、遠藤の作品がきっかけで入信している。少なくとも信仰の意味を考えるきっかけとして遠藤文学を利用した人は数限りない。事実、本稿がその証である。その意味から、生前、遠藤が望んでいたように、彼の生は「捨て石」ではなく「踏み石」となった⁵³⁾。

だが、それでもなお、遠藤の信仰を丸々キリスト教信仰と呼ぶには抵抗がある。抵抗はあるが、それもまた信仰であろう。その点は揺らぎそうにない。遠藤が真摯にキリスト教と対峙し、秘密を抱え、あれこれと悩みつづけて生きてきたからこそ、現代もなお遠藤周作の言葉が生きつづける。苦悶があったからこそ、読者の文学観に訴えかけ、読者の信仰心を揺さぶるのだ。

この世には、キリスト教、イスラム教、仏教という世界宗教があり、ユダヤ教や神道などの民族宗教がある。唯一に収斂する一神教という着眼もあれば、多へと発散する多神教や汎神論という見方もある。従来、宗教には序列めいたものがあり、本物・偽物、正・邪という区分が当然のこととしておこなわれてきた。しかし、それが宗教のあり方なのだろうか。遠藤は信仰の秩序や優劣を疑っていた。富士山の喩えにこだわったのもその表れである。その意味から、遠藤の信仰心は新しい。そして、しなやかで、かつ日本人に向けた強い説得力を持っている。

神はそもそも隠れた存在である。遠藤の作品に則して言い換えるなら、沈黙している存在なのだ。ところが、人はつい神の存在の有無を論じたがる。「神はいるのか、いないのか」――かつて18歳の遠藤周作がとらわれたよう

に。しかしながら、この問いは悲劇へ通じる。西洋的な一神教であれば、その問いを機に自らを超越的立場へと引きあげ、他の宗教を攻撃する便法としがち。一方、日本的な多神教（汎神論）であれば、その問いにとらわれることで、畢竟、虚無へと帰結することになりかねない。

隠れているから神であり、沈黙しているからこそ神なのだ。だが、沈黙のなかにも聞こえてくる声がある。信仰がこの先も永遠につづいていく所以である。 (完)

注

*注番号は本稿独自のもの。「遠藤周作の秘密（上）・（中）」からの通しではない。数が3桁となる見づらさを避けたかったし、本稿のみをご覧になる方のわずらわしさをなくすためでもある。したがって（前掲書）の指示も本稿独自の独立したのものとし、「上」「中」ですでに紹介した文献であっても、再度、使用した版を示した。なお、文献の発行年は西暦で統一している。

- 1) 北森嘉蔵「足の痛みの文学——遠藤周作」（『愁いなき神』講談社学術文庫 1991年7月10日所収）pp. 335-336。
- 2) 小説『影法師』でも孤独な母の死は扱われている。だが、そこでは主人公が18歳のときに母親が亡くなるという設定になっている。
- 3) 遠藤周作『母なるもの』（新潮社 1971年5月20日）p. 32。
- 4) 「母を棄てた」父に対する憎悪や父の凡庸な精神姿勢への批判は、ときに辛辣を超え悲壮でさえある。なかでも『我等なゼキリスト教徒となりし乎』（光文社 1999年1月30日）で安岡章太郎が伝えるエピソードには遠藤と父親とのななんと表現できない葛藤が集約されているように感じられる。「もう二、三十年前のことですが、彼（引用者注：遠藤周作）は挽茶色のルノーに乗っていた。で、雨の降る日に渋谷の道玄坂しぶや どうげんざかをひきちい通っていたら、坂の途中で父親が傘も差さずにぼんやり立っているのが見えた。だけど車を停めないで、真っ直ぐ前にどんどん行ってしまった。この話にどういう意味があるのか問おうとは僕は思わない。少くらしい親切にしてもいいのじゃないかとは思いましたが。しかし彼にしてみれば、非常に意味のある行為だったのでしょう」（p. 168）。だが、その父は、遠藤の評論集『フランスの大学生』が丸善や三越の日本橋店に並んだときに「全部先回りして買い占めてくれてあった」（p. 166）人物でもある。
- 5) 大里恭三郎『孤高の現代作家』（審美社 1983年10月20日）p. 197。
- 6) 永藤武「遠藤周作・信仰と文学のはざままで」（戸田義雄編『日本カトリシズムと文学』大明堂 1982年5月28日初刷未見、1982年11月17日第2刷所収）p. 103。

- 7) 河合隼雄『母性社会日本の病理』(中央公論社 1976年9月10日) pp. 171-172。
- 8) 大庭みな子『ふなくい虫』(講談社 1970年1月20日) p. 155。
- 9) 遠藤順子, 木崎さと子「カトリック作家 遠藤周作を想う」(『遠藤周作のすべて』文春文庫 1998年4月10日所収) p. 40。
- 10) 矢代静一「回想六つ」(『群像』12月号 1996年所収) p. 139。
- 11) 遠藤周作「六日間の旅行」(『影法師』新潮社 1968年11月15日所収) p. 50。
- 12) 遠藤周作『僕のコーヒーブレイク』(主婦の友社 1981年12月23日) p. 151。
- 13) G. W. Allport, *The Individual and His Religion — A psychological interpretation*, Constable and Co., 1951, p. 36.
- 14) 遠藤周作『私にとって神とは』(光文社 1983年6月25日) pp. 9-26。
- 15) 遠藤周作『万華鏡』(朝日新聞社 1993年4月1日) p. 145。
- 16) たとえば, 遠藤周作『作家の日記』(作品社 1980年9月30日)の1951年9月14日(金)にはこんな記述がある。「もし, 神がなかったら — 聖職者たちの人生は全く虚無であった事になる」と。同じ文言は, たとえば, 『沈黙』のなかに「(しかし, 万一…もちろん, 万一の話だが)」という仮定のもとに記された「神の不在」にも通底している。
- 17) たとえば「新潮」6月号(2000年)のなかに, 山根道公は「洗礼の時と同様に 烈しい母親の勧めに従う形で, 上智大学予科に通うことになったのだろう」(p. 196)と記している。
- 18) 遠藤周作「芸術の基準」(『宗教と文学』南北社 1963年7月10日) p. 140。
- 19) 川嶋至『文学の虚実』(論創社 1987年5月15日) p. 188。なお, 川嶋のこの記述は, 遠藤がエルサレムという町が何世代にもわたって都市が層をなして築かれた丘のようにふくれあがった状態(テルと呼ばれる)となっていることに引っかけて, 「小説家の内部」に関して, 「物を言うのは自分の存在の内側にある人生体験の集積と芸術的影響が混沌として集積している深い井戸によってである」(『現代にとって文学とは何か』:『遠藤周作文学全集第十巻 カトリック作家の問題・宗教と文学』新潮社 1975年10月20日所収 p. 213)とした発言を看過している。
- 20) 遠藤周作『心の夜想曲』(文藝春秋 1986年2月15日) p. 13。
- 21) 安岡章太郎, 井上洋治『我等なぜキリスト教徒となりし乎』(前掲書) p. 48。
- 22) 第33回芥川賞(昭和30年度上半期)の井上靖による選評より引用。
- 23) 「國文學 特集・遠藤周作と北杜夫」(學燈社 1973年2月号) p. 13。
- 24) 『母なるもの』(前掲書) p. 33。
- 25) 村松剛『西洋との対決』(新潮社 1994年2月20日) p. 212。
- 26) 「文芸」7月号(1965年 第三の新人特集) p. 142。
- 27) すでに見た, 正宗白鳥の臨終の際の「アーメン」が真の回心かどうか文壇であれこれと話題になったのは, 遠藤が退院後に自宅療養していた時期と重なる。
- 28) 遠藤が自らの療養生活を書き記した長編小説に『満潮の時刻』(新潮文庫 2000年2月1日)があるが, その最後に「神の加護」を投影したとおぼしき「基督の

眼差し」＝「九官鳥の眼」（ちなみに病院での生活を描いた作品に九官鳥は何度か登場している。たとえば遠藤が入院中に書き記した「九官鳥の話」のなかでは、病室内に置いた九官鳥に「私は」、「おい、おい、本当に神さまはいるのですか」と語りかける）と見なした挿話が置かれている。「自分の眼にあの九官鳥の眼差しを重ねあわした。九官鳥の眼差しの上にあの基督の眼を重ねあわした。そして今、彼の病院生活という経験の円環がやっと閉じようとするのを感じた……」（p. 282）。

- 29) 遠藤周作「私のもの」（『遠藤周作文学全集 7 巻』新潮社 1999 年 11 月 10 日所収） p. 151。
- 30) J. Green, *Pamphlet contre les catholiques de France*, Plon, 1963, p. 25. なお、通常の読者が文学作品から得たいと望むものは、かつてクロード・エドモンド・マニーが希求したような「擁護教文学からの授かり物」とでも称すべき「道徳的な利益」le bénéfique moral ではない。cf. Claude-Edmonde Magny, *Histoire du roman français depuis 1918*, Seuil, 1952, p. 131.
- 31) Herzog のカナ表記はヘルツォーク（ないしはヘルツォク）の記述が一般的。ちなみに『上智大学史資料集』（補遺 1993 年 7 月 7 日：人名索引）にはヘルツォクとカナ書きされている。しかし、本稿は遠藤周作ならびに郁が用いていた表記を採った。
- 32) 拙論「遠藤周作の秘密（中）」（『明治大学教養論集』402 号所収）注 52）参照。
- 33) 谷沢永一『方法論論争』（和泉書院 1995 年 9 月 15 日） p. 11。
- 34) 以下の「年譜」制作にあたって、「遠藤周作の秘密（中）」（前掲書）に載せた「補足資料」に眼を通した。なお、ヘルツォグ神父に関する記述は山根道公制作の「年譜」がもっとも詳細である。
- 35) 『影法師』（前掲書）によれば「少年のくせに僕は貴方の彫刻のような彫りのふかい顔や葡萄色の澄んだ目をみて、つくづく、男前やなアと思ったのを憶えています」（pp. 9-10）とのこと。
- 36) 年譜類に記述はないが、他にもう一冊、ヘルツォグ神父の著書を翻訳した形跡がある。ペーテル・ヘルツォグ著、遠藤郁訳『聖心に就いての黙想』（ドン・ボスコ社 1949 年）という翻訳。だが、文献の所在がつかめなかった。
- 37) 1962 年から 1965 年にわたり開催された第 2 ヴァチカン公会議において「教会憲章」が決定された。その第 1 章「教会の秘儀について」のなかで、カトリック教会は唯一の聖であり普遍であるとしながらも、はじめて、カトリック教会以外にも聖化と真理の要素が見いだせると記した。遠藤周作はこの文言にどれほど感められたことであろう。なぜなら、これまで普遍の信仰たるカトリックがさまざまな懐疑や疑問をねじ伏せていたわけだが、はじめてカトリック教会が教会以外の声に耳を傾けた瞬間といえるからである。ちなみに、1962 年から 65 年とは、昭和 37 年から 40 年にあたる。池田内閣の高度経済成長、東京オリンピックの開催、本格的なテレビ時代の幕開け、そんなあれこれが進行していた時代。そのとき、ヴァチカンでは、カトリック教会のあり方を根底から覆すドラマが進行していた。犬養道子は『聖書を旅する 5』（中央公論社 1998 年 5 月 7 日）で、教皇

- の言葉を引いてこの会議の性格をこう規定している。「教会の^{パンセ}思いをすっきりとさせ、再生新生と信の一致を促すための公会議」(p.305)であった、と。
- 38) たとえば『現代文学大系 61』(1968年3月10日)に載っている「自作年譜」がそうである。なお、遠藤の自作年譜を含めて多くの年譜が遠藤郁の死亡年を誤って記載している。
- 39) 遠藤周作『足のむくまま 気のむくまま』(文藝春秋 1982年5月20日) p.252。
- 40) 遠藤順子『夫の宿題』(PHP 研究所 1998年7月23日) p.67。
- 41) 遠藤順子「夫・遠藤周作と過ごした日々」(『遠藤周作を読む』笠間書院 2004年5月31日所収) pp.29-31。
- 42) 『影法師』(前掲書) p.17。
- 43) 同上 p.15。
- 44) たとえば谷沢永一『書誌学的思考』(和泉書院 1996年1月15日)に記されたつぎの言葉を知らぬわけではない。「異性問題を起こした指導者など少しも珍しくなく、それで失脚したスカタンもあれば、全く失脚しなかった物も数多い。要は人物そのもの、処し方そのものにかかっている。そこを押さえる確証なくして、男女問題が生じたからどうのこうのと論じるのは、三面記事以下の愚論ではないか。人間を見ずには事件は説けないのである」(pp.516-517)。
- 45) 遠藤周作「文学と宗教——無意識をめぐって」(『慶應義塾大学百二十五年記念講演集』1984年4月1日所収) p.17。
- 46) 『影法師』(前掲書) p.11。
- 47) 田中澄江「マリアのいたわりを希求する」(『遠藤周作の研究』実業之日本社 1979年6月25日所収) pp.109-110。
- 48) 『影法師』(前掲書) p.23。
- 49) 河合隼雄, 藤田統, 小嶋謙四郎『どう考えるか 母なるもの』(二玄社 1977年4月30日) p.165。
- 50) キリスト教を「『西洋』キリスト教」から脱皮させたいという思いは、遠藤周作と井上洋治が共通に抱いていたテーマである。なかでも自然を人間と対立させて、これを支配、服従させようとする西欧近代の精神に対して、二人は強烈な違和感をもっていった。そんななか「キリスト教の考え方は、汎神論^{パンテイイズム}ではないが、汎存神論^{パンエンテイイズム}である。神は生とし生けるものは、同じではないが、決して切り離されて存在するものではない」(井上洋治, 山根道公『風のなかの想い』日本基督教団出版局 1989年7月10日 p.60)との着眼(世界が神のなかにあるとする「万有在神論」の考えを踏まえた用語であろう)は、二人の共通感覚を端的に要約したもの。言い換えれば、「普遍的であるということは一様性^{ユニフォーミティ}ではなく、多様の中での一致^{ユニティ}でなければならない」(井上洋治『余白の旅』日本基督教団出版局 1980年9月1日 p.63)とする観点といえる。
- 51) 遠藤周作「日本人と基督教」(『キリスト教ハンドブック』三省堂 1993年7月1日所収) p.17。なお、「山頂に登る」という比喩はマハートマ・ガンジーの語録などに展開されている以下の文言,すなわち「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集り通ずる様々な道である。同じ目的地に到達する限り、

我々がそれぞれが異った道をたどろうとかまわないではないか」（『深い河』講談社 1993年6月8日 p.306 に引用）と同じ着眼。ただし、「富士登山」を例に持ち出したのは、仏教学者平田精耕との対談で平田が披露した比喩がそもそもの出所であろうと思われる。平田は遠藤に「仏教とキリスト教、特に禅とキリスト教というのはまったく相反する宗教です。しかしそれは理論上の話であって、実際にやってみたら、ぼくは同じところから出ているのではないかと思います。あるいは、富士山の頂上へ北の方から登るのと南から登るのとの違いのようなもので、同じ所を口指している点ではかわらないんじゃないかなあと思います」（遠藤周作『こころの不思議、神の領域』PHP 研究所 1988年7月15日 p.20）と語った。このとき遠藤はこの表現に、我が意を得たりと直感したに相違ない。以後、この喩えはいろいろな形で応用されることになる。

- 52) 遠藤はヒックの神学について彼なりにかなりつっこんだ学習をしていた。ただ、『「深い河」創作日記』（講談社 1997年9月19日）には苦い思いがつつられている。「10月7日（月）月曜会。『ヒックの神学』についての話。パネラーの間瀬教授と門脇神父の間にイエス論をめぐる激論。というより喧嘩。外は烈しい雨。司会者の私はヒックの考え方と従来のキリスト論の間に引き裂かれて当惑した」（p.038）とある。
- 53) 『我等なぜキリスト教徒となりし乎』（前掲書）のなかで、井上洋治は遠藤が口癖のように言っていた言葉として「俺は踏み石になりたい。捨て石にはなりたくない」（p.243）を紹介している。『留學』（文藝春秋新社 1965年6月30日）のなかにも同じ嘆息が記されている。「俺は棄石だったのか、踏石だったのか……」（p.308）。

（ひさまつ・けんいち 商学部助教授）